

二十世紀中国発見のビザンチン金貨

秋山進午

はじめに 東アジア考古学を専攻する私が、貴学会で発表の機会を与えられたことは、大変光栄であります。種々ご教示を頂きますよう、お願い申し上げます。二十世紀のごく初め、中央アジア探検時代にヘディンがコータンから、スタインがアスターナから、仿製ビザンチン金貨を発見したことは、早く知られていました。しかし、古文献の朮菽国（＝ビザンチン帝国）との東西交渉の様相が、中国側で具体的に意識されたのは、1953年、陝西省咸陽市底張湾の、隋代の武将独孤羅の墓から発見された、一枚のビザンチン金貨からで、それまで、中央アジアに止まっていたビザンチン金貨が、当時の隋唐の首都にまで届いていたことが明らかとなったからです。この一枚の金貨の発見を契機に、夏鼐・岡崎敬氏らによって進められた東西交渉史の研究が、今日のシルクロード・ブームへと繋がったものです。ところで、近年、その独孤羅の夫人、賀若氏の墓が発掘され、そこからもビザンチン金貨が発見されました。私が、先輩、岡崎氏の後を追って、ビザンチン金貨に取り組んだのはその為です。

ビザンチン金貨の集成 夏鼐・岡崎敬氏らが集成した1980年までに、20枚であったビザンチン金貨は、その後の20年で、仿制品を含め、総数50枚を越えています。新疆の15枚が最も多く、甘肅、青海が各2枚、寧夏と陝西が各10枚、それに河南の1枚は、そのままシルクロードからの繋がりです。一方、当時、西魏と対立していた東魏の地、河北の5枚は、北方草原の遊牧民、柔然経由のルートです。内蒙古と遼寧各1枚も同じルートでしょう。それに対し、華中・華南からは1枚も発見されていません。

出土したビザンチン金貨は、ローマ帝国が東西に分裂してのち、その二代目テオドシウスII世(408-450)金貨4枚から始まり、レオI世(457-474)2枚、ゼノ帝(474-491)1枚、アナスタシウスI世(491-518)が6枚と最も多く、ユスティヌスI世(518-527)3枚、ユスティヌス・ユスティニアヌス共同統治(527)4枚、ユスティニアヌスI世(527-565)2枚、ユスティヌスII世(565-578)2枚、フォカス帝(602-610)3枚と、少し途切れた時もありますが、大凡は続き、最後はアラブ帝国と戦ったヘラクリオス帝(610-641)1枚までです。ヘラクリオス帝金貨は他にアラブ仿制品が2枚もあります。ササン朝銀貨と並んで、当時の東西交渉の様相の一端を物語るといえましょう。

ビザンチン金貨とその用途 『隋書』卷二十四、食貨志に「後周（＝北周）之初、（中略）河西諸郡、或用西域金銀之錢、而官不禁。」と河西回廊以西では、西魏から北周にかけて、ビザンチン金貨やササン銀貨が通用していたことが記されています。しかし、裏返せば中国本土では、官が通用を禁じていたことも判ります。

中国本土出土のビザンチン金貨には、吊環や綴孔を開けたものがあります。実用の貨幣ではなく、首にかけて装身具としたものです。通常は1孔か2孔ですが、寧夏固原の田弘墓の4枚には3孔と4孔

が2枚ずつあります。冠か何かに綴じ付けたようです。しかし、孔を開けた金貨を更に口中に入れた例があります。早く、アスターナで死者口中から仿製ビザンチン金貨を発掘したスタインは、ギリシャ故事の、カロンに支払う渡し賃としました。一方、独孤羅墓のビザンチン金貨がやはり口中からと見た夏鼐氏は、中国古代の伝統である飯含の風習としました。その後の中国の研究者の多くは、ニュアンスは異なれ、中国伝統説です。ガンダーラ美術研究の小谷仲男氏はクシヤンの習俗説で、寧夏の研究者羅豊氏もゾロアスター教を媒介として、それを支持しています。私は中国国内と西域とは、切り離して考えるべきである、と思いますが如何でしょうか。新疆の様相はまだ完全に報告がなされていません。特に出土の金貨がほとんど仿制品ばかりである、ということはどう解釈するか、中国でのビザンチン金貨をめぐる問題は、まだ決して片付いていないことを最後に申し上げて終りとします。